



“大きな猫”
7歳 ハンガリー

幼年美術

599

2019 2月号

発行所 大阪府東大阪市長田中4丁目6-3
ぺんてる(株)大阪支社内
全国幼年美術の会 〒577-0013 ☎(06)6747-1601
発行人 木代喜司
年間購読料 3,000円 1部300円(送料込み)

第48回世界児童画展

作品より



“メロディオン たのしいな”
4歳 静岡県



“みんなでどうろこうじ”
5歳 京都府

巻頭言

ある幼稚園でのお話をです。

園長先生と園舎の廊下を歩いていると、五歳児クラスの男の子が「園長先生、折り紙にいのちってある?」と尋ねてきました。園長先生は穏やかな笑顔で「あるね」と返事しました。するとその子は「うん!」と納得した笑顔でその場を立ち去りました。

ほんの十秒足らずのやりとりの中に、この

園の保育の真髄を見た気がしました。

その子の手には、自分で折ったのでしよう、犬や蝶蝶といった生き物の折り紙がいくつか大切に持たれていました。

後で園長先生に聞いた話ですが、お誕生会で、生まれてきた「いのち」の大切さについて、そして、どんなものにも大切な、かけがえのない「いのち」があるのだということについてお話をされたのだそうです。

どんなものにも「いのち」がある、という言葉が、とても心に残ったのでしょう。そして、その子にとってそれは、犬のような折り紙でも、蝶蝶のような折り紙でも無く、犬そのものであり、蝶蝶そのもの、まさに「いのち」ある存在だったのです。この子は、園長先生にそれを確かめたかったのでしょうか。こどもたちは、教えられなくても、絵を描き、ものをつくる遊びに没頭しながら、想像の世界と現実の世界を自由に往き来し、他者の痛みも喜びも自らのものとして受けとめ、共感しながら、思いやりの心や愛他心を育んでいるのです。

先ほど、積極的に関わることと、他者との関わりが求められていると話しましたけれども、遊びを見ると、遊びの課題はいつたい何かな。もう一つは、他者との関わりはいつたい何かなというのを見ると、とても大事なことが見えてくる。

遊び手、学び手としての能動性や自立がどういうふうに育っているのかが見えてくるし、その子なりの課題がどういうふうに生まれてくるのかも見えてくる。モノとの関わり、人との関わりの成長も見えてきます。

見えてくるんだけども、見えていない場合もあるかもしれません。だから今ここで、遊びの質を考えていってみたい。遊びこそアクティブラーニングというならば、遊びの質を見直したい。それから、子どもを有能な学び手として、見る眼差しが必要というならば、子ども理解と遊び理解の両輪で、子どもを見る眼差しをチェックしたい。遊びの中の体験が子どもの中に文脈を生むように、次々と自分の中から遊びの課題が生まれるといふことは、子どもの中に体験が統合されているということになりますので、体験がどういうふうに関連付いているのかを見てきたい。

体験と経験は似た言葉ですけれども、そもそも違います。体験というのは1回1回でも終わりになつてしまふけれども、それが抜き差しならないものとなつて、その子の中に、あるまとまつ

講演 「遊びを中心とした保育」再考 ～遊びをどう理解し、援助するか～

聖心女子大學教育學科教育學專攻 · 初等教育學專攻

教授 河邊貴子氏

前号の
続き

たものとして刻み込まれると、それは経験といいます。体験が一発で終わらないで、繋がりをもつて経験化になることをを目指したい。

お友達と共にしたりする時に、表現ということが大事になつてくると思いません。経験があつて、いつまでもそういうことを刻み込む。遠足に行つたら、その絵を描いてみると、遠足に行つたことが、その子の中に刻み込まれたりする。それは1回の体験を刻み込んだということになると思います。

1月の5歳児になると、かるたを作つたりするんですね。レモンをかじつちゃつた。レモンの「レ」。「れ」の付く言葉を集めましょう。いろいろあると思います。レンコンもそうですね。「れ」の付く言葉を集める。これは知識なんんですけど、でもたぶん、この人の中にレモンをかじつちゃつたといふ体験があつたんでしようね。だから、「れ」と来たらレモン。レモンだけではなくて、それをかじつたときの酸っぱさとか、「うわっ」となつた気持ちが同時に思いだされれて、言葉も、レモンをかじつらやつた。

表現されている。例えば、これは5歳の女の子たちの遊びですけれども、5歳の女の子がぐらいになると凄いですから。アイドルへの憧れも凄いです。この人たちがやっているのはアイドルショーンなんです。何て書いてありますか?「アイドル、水曜日からもやつてるよ」と書いてあるのかな?これが彼女たちが持っていたスマホです。アイドルが持つていてそうなスマホでしょ。牛乳パックを切つてスマホをよく作るんですけど、本当にアイドルぽいものを作つたりします。

次は横浜の幼稚園です。ベイスター^ズが野球教室にやつてきた。現役の選手ではなくて、たぶんOGだと思うんですけど、野球教室にやつてきた次の日から始まつた、ベイスター^ズごっこです。「これをこう着て選手になるんですね。チケット売り場もできるんです。ベイスター^ズチケット売り場。どんなチケットか」というと「ベイスター^ズやつてますよ。来てね」。「ベイスター^ズは5時から。来てね」。5時からというのがナイター^{ばく}くて、すごくいい感じじゃないですか。

では、5時はどうするかということになつて、お弁当を食べたあとを5時といふことにしようとなつて、5時になつたらみんながチケットを買って集まつて、ベイスター^ズの試合を見ます。だから、すごく憧れの出来事とか、何になつてみたい。それを見る子もいればアダンスを踊る子も出てくる。
お弁当を食べる前は、私は使わない用語ですが、所謂「自由遊び」の時間に、子どもたちが自分のやりたいこと

を選択して遊ぶ幼稚園ですが、男の子たちのベイスターズになりたい子はベイスターズの準備をし、チアガールになります。小さい子はダンスの練習をしているんです。

そのほかにチケットを作りたい人たちもいれば、売り子になつてビールを売つている人たちもいる。ビールを作つている子たちもいるんです。それ以外は、遊びをしていた子たちが観客になつているんです。

先生のお膝の上で泣いている子は転園してきたばっかりで、自分もベイスターズになりたいんだけど、うまく仲間になれなくて泣いています。一つのベイスターズごつこの中にもいろいろ一人一人の物語もあります。

ベイスターズごつこという物語を全体で見る眼差しと、そこに一人一人がどういうふうに関わるのかという個別に見る眼差しの両方が必要になつてきます。あるいは、対象そのものに関わつていく。

ベイスターズは、いま5歳の6月ですから相当運動しながら遊べますけれども、先ほども言つたように、3歳からそれができるわけではありません。これは対象そのものにじっくり楽しむ遊びというのがベースに必要になつてきます。

これははさみを使って、何をするかといふと、はさみの切れ味を楽しんでいるところです。どんどん切つて、先生が持ち方どうだつけといつて1回直してくれるんだけど、この方が切りやすいんですね。

カシカシと切つたものをカウンターの上にいっぴいまとめて、最後に透明のパックの中に集めて満足するという遊びです。最初はこういうふうに道具との出会いを楽しんだり、対象が変化して

いくこともすごく楽しみます。満足する
とお友達の片付けも手伝つたりします。

どんどんそこにイメージを広げていつたりします。この子は空き箱をいじつているうちにトレーラーが出来ちゃつた。最初はたぶん、その意図はなかつたと思うんですけども、次第にトレーラーに見えてきて、「トレーラー」と言っています。先生に見せて回つていい。このトレーラーを置いて彼がつくり始めたのが、一見して明らかに高速道路先生が向こう側にあつたアイスクリーム屋さんを動かしてくれて、高速道路をつくるんですけど、お友達が寄つてきて、「ハルキ君、高速道路作つてるの?」と言つてくれたんです。ハルキ君が、どうして分かるのと聞いたら「だつて高速道路にしか見えないじやん」と言つているんです。そんなことを言われて「入れて」と言われたら「いよいよ」と言つちやいますよね。いいよと言つちやつたら、「でも、これ危なくない」といつて、お友達がどんどん埋めちやう。埋めちやう。めちやう。ハルキ君のイメージは、ちよつとこうじやなかつたんだけどなどいう気持ちになつちやう。

4歳ぐらいから他者と関わると、モノへのイメージも多少ずれが出てくるので、このあたりに人との関わりの必要性とか、調整の必要性というものが生まれてきます。そうこうしたあと、お友達は空き箱の場所に行つて自分の車をつくっているんですけど、ハルキ君はちょっと諦めた感じで、色塗りをしています。この先つちよが白くなつていてる前は黄色になつていて、黄色で塗つていたんですけど、そのあと白くしてまた塗つています。

私はよく分からなかつたので、「さつ
きの黄色は何だつたんでしようか?」
と聞いたら、あれはベンキ。じゃあ、
いまはと聞いたら、これは防腐剤と言
つていいますので、そのものに意味付
していく。自分が関わつたもの、偶發
的に出あつたものにどんどん意味付け
して、自分にとつて抜き差しならない
ものをつくつていく。面白いですね。
ところがこのあと、お友達が車を持
つてきて、ハルキ君の車の前に置いちゃ
つたので、そこで大げんかして、この
高速道路を倒してしまいます。

本当は、積み木をこんなに使つてしま
わなければ、ハルキ方式でやつてい
れば、上りをつくつて下りもつくるこ
とができるんですけど、こちらがやつ
ぱり、友達とモノの関わり方のずれで、
遊びのイメージもずれしていく場合があ
るんですね。だからこそ、私たちは遊
びの様子を、遊びの経過をしつかり読
み解く必要があります。

でも、ここは難しくて、幼稚園だと
一人の先生が30人ぐらいの子どもを見
ていますから。法律的には35人まで見
ていいことになつていて、子どもたちが群れて遊んでくれているとし
ても、五つか六つの遊びをしていると
したら、全部見ていると一つの遊びの
経過を読み取れない。なので、点と点
を結ぶ理解の仕方ということが必要にな
なつてきます。

さつきまで高速道路をつくつていた
のに、いつの間にか道路が埋まつてい
て、しかも次に見たときには倒れてい
た。この間に何があつたのかなという
ことを、できるだけ子どもに共感的に、
肯定的に理解する。

何かあつたんだな。意味のあること
が起きたんだろう。「何をやつてるの?」
と言わないで、きっと意味のあること

が起こっているんだろうというふうに、まず読み取つて、そこから見ていなかつた部分を、子どもと一緒に対話しながら埋めていく。それを記録していくことによつて、今日は記録の話はできませんけれども、点と点をできるだけ精度を高めて理解していく力が、保育者に付いていくものと思われます。

例えば、今度は体験の共有の方ですけど、京都の泉山幼稚園さんというところに、毎年3回ぐらいお邪魔しています。とても素晴らしい保育をしていて、「鞍馬山の天狗さまに会いに行く」という活動があるんですけど。

ここの大狗さまは、東京の高尾山の大狗です。これはその近くの幼稚園の活動なんですけど、遠足で高尾山に行きます。天狗から「待つている」とのお手紙も届くので、子どもから出した、天狗へのお返事も貼られたりしています。「てんぐつてどんなだらうね?」と先生が投げ掛けて、こんな天狗の絵が出来ました。これは墨で描いたものです。先生がとてもセンスのいい方で、この天狗の絵を貼る台紙も和紙で、とてもすてきな表現になつていてました。

ここから遠足に行つて帰つてきたあとに、1回遠足に行つた体験を子どもは遊び化して、経験化していきます。薬王院というお不動さんがあるんですけど、そのさい錢箱と、煙を頭に浴びた経験を子どもたちは再現しています。「お札を買うためのお金を作る」と言つて、お金を作つたりして、お札の売り買いをしていました。

ロープウェーに乗つて行つたらしく、ロープウェーを作る子もいました。ロープウェーはどうやつたら、あのロープのところをこう行くのかすごく工夫していて、ここで試行錯誤をやつてい

て子どもたちはびを通して経験化されると、経験化の度合いによって、時間が経過するにつれて、経験が豊かでないほどもの生き体験が豊かでないといふ表現につながります。

ました。倒れちゃうので、すごく工夫していました。ここだけ終わらないのが子どもで、実際に天狗になつちやおうと、対象化してものを描くだけではなくて、これが幼児期の大きな特徴なんですけど、自分が憧れたものに同化していく。先ほどベイスターズもそうでしたけど、同化していくという表現の仕方が本当に好きです。おそらく8歳ぐらいうまで好きと言われているんですけどなかなか時間的に許されないので、幼児期にすごくやるんだと思うんですね。天狗になつちやおう。そしたら天狗の下駄を作りたい。1本歯の下駄を履いて団扇を持つているはずだからといって、下駄作り。先生が近くの畠屋さんに行つて畠のへりをもらってきてくれて、みんなで下駄を作つたり、団扇を作つたりするコーナーも生まれます。1日中1本歯で歩く練習。これで階段を上つたりして、すごい恐怖でしたけれども、そんな遊びで1日が終わつたりしている。



りませんし、学びは少ないものになりますので、感じることがいっぱいの生活を保障してあげたいのです。それは1年間の行事の中で、感じるもののがいっぱいできるような節目の行事が練り込まれるということも大事ですし、日常の中に子どもたちの感性が震えるような感動に出あわせることも大事だと思います。

先ほど、実技研修をざつと見させていたいたんですけれども、小学校の図工の先生でしようか。こんな素敵なビーズの使い方があるんだと思いまして。石こうを固めるところを楽しい遊びができるんだと。

幼稚園の先生は総合的にいろいろ考えるものですから、素材の研究に割く時間がすごく限られているのですね。でも、教材研究の時間は実はとても大事で、子どもたちが感じることができるように媒体に、どう出あせていったらいいのか。その媒体研究、教材研究、今日のような実技研修は実際に有効で、是非こういう機会を捉えて、いろいろな媒体をため込んでおくといいと思います。もちろんただそれを子どもに下ろすのではなくので、そこで子どもが何を感じるかということを出あわせるということでしょうか。

もう一つは、仲間と感じたことを共有する体験。仲間に受け止められる喜び。表現というのは、最初はただの表出だつたりします。それを仲間が受け止めてくれることによって表現に育つていくのですので、仲間に受け止められる喜び。それから、協働していく喜びということも大事だと思います。

泉山幼稚園の事例では、6月に伺ったときにやっていたものを紹介します。製作のコーナーもすごく充実しています。

この男の子はいまから迷路作りをするんですけれども、ティッシュペーパーの箱を、ただの空き箱をどんどん置いておくのではなくて、1センチぐらいの幅にわざわざ切ったものを大量に用意しているんですね。

そうすると、それを使ってお友達とくつつけて、迷路作りがすごく長く出来たりするのです。ですから、ただの廃材と言いたくない。空き箱をただどんと出すのではなくて、工夫しながら出すといふのも、子どもの感じる心を導き出していくのにいいなと思います。あるいは、そのときに3歳のお部屋にあつたコーナーですけど、「ぐるぐるジユース」という本を読んだあとにこんな設定。これも自分でどのジユースのカツプを使うか選択できるし、ジユース屋さんになるため、こんなツールも用意されていて、これをかぶるとすっかりジユース屋さんになつた気分になつて、好きなジユース。しかもフルーツジユースなのでいろいろ自分でトップピングできる。

塗つたあとに自分でトップピングする、そのトップピングが落ちないよう、絵の具の中に糊がちょっと混ざついたりします。こういう研究をされていると、子どもたちの表現をうんと豊かに引きだるんだなと思いました。

以上のことことが、これからます大切にしたいことです。先ほど申し上げましたが、豊かに生活できる生活体験や共有体験、それから遊びに没頭できるゆとりある時間、空間、それから自由に出来るという精神的な自由感。

遊びの充実と環境の構成。弛まない再構成。絶えず環境は再構成されていきます。子どもの状態を見ながら、砂

場にはいま何が必要か？園庭にはいま何が必要か？造形の素材としてはいま何が必要か？そんなことを常に再構成していく。

そのためには理解が大事になってしまいます。子どもの理解と同時に意欲的な環境理解。子どもの中の文脈がつながるような何かテーマがあるといい。今日はお話しできなかつたんですけど、例えば、「天狗に会いに行くよ」みたいなテーマ。みんなが関心を寄せるテーマみたいなものが投げ込まれていたり、日常生活の中で子どもが発見する場合もありますので、そういうテーマを。「これが子どもにとって、特に乳幼児期の子どもにとって大事だ」ということを社会に示していく必要がありますので、皆さまの実践を可視化できるよう、写真とエピソードを合わせた発信が、今とても効果をもたらしています。是非、皆さんの実践をどんどん発信してください。それをニュージーランドのではラーニング・ストーリーと言っていますけれども、一人一人のラーニング・ストーリーはニュージーランドの方式です。日本には日本のやり方があると思いますので、日本の遊びの展開を写真とエピソードでどんどん発信する。子どもの見方、あるいは環境、表現の素材などの見方を、園内研究会を充実させて自分たちで高めていく。そのことはこれからますます必要ではないかななど思います。いまが正念場ですので、ぜひ実践の力を借りて、誤った方向に行かないようにしていきたいと思います。早口ですみません。言いたいことはほぼ言い終えた感じです。質問があつたら、ぜひ先生にお伝えください。帰つてから何らかのかたちで返事したいと思います。それでは終わらせていただきます。ありがとうございました。

つい先日までは、新年だと思っていても、もう早二月が終わろうとしています。この紙面をご覧いただいく頃は、恐らく年度末でお忙しい三月の頃と思います。

去る二月八日に、昨年十二月の運営委員会にて選出・承認されました木代喜司新会長のもと、本年最初の常任委員会が開催されました。そこへは、新たに副会長としてお迎えした大橋功先生も出席されました。先生には既に夏季大学へ何度も講師としてお招きして参りましたし、本会の有力後援団体である、公益財団法人美育文化協会の季刊誌『美育文化ポケット』の編集統括をされてることからも、長くからのご親戚のようなご縁があり、何の違和感もなく、同席いただきました。その大橋先生に、早々巻頭言に、「登場願います。」

自身のエピソードを通して、「子どもたちは教えられなくても、絵を描き、ものをつくって遊びに没頭しながら、想像の世界と現実の世界を自由に往き来し、他者の痛みも喜びも自らのものとして受けとめ、共感しながら、思いやりの心や愛他心を育んでいるのです。」と述べておられます。昨今、全てが先へ先へ早く早くの風潮からか、効率や結果に心を奪われた教育・保育が氾濫しています。教え込もう、引っ張ろうという大人の浅はかな姿を反省させられる大切な指摘です。私たちは、その様なこどもの心が育まれる環境を如何に作り改えて行くのか? そのことを課題にした学びを続けていかなくてはなりません。

図らずも、先の会議の最後に新会長の木代先生は仰いました。「研修会」というと、誰かが誰かに教えようとすることがあるが、それは駄目です。研修会とは共に学びあう姿勢がなければ意味がありません。幼美の研修是非とも、そのことを大事にして欲しいです。」

「共に学びあう」、教育・保育も、又そこに縁ある者にとつても、基本中の基本であることを改めて肝に銘じるところとなりました。